

井原市のご紹介

井原市は、岡山県の西南部に位置し、西は広島県に接しています。豊かな自然に囲まれたまちで、市内を清流小田川が貫流し、その流域の平野部に市街地が形成されています。

古くから藍染木綿織物産地として栄え、アパレル製品を製造する繊維産業を中心に発展し、昭和40年代からは自動車部品、電気機械器具、プラスチック製品等の製造も盛んになり、現在は、多様な産業が集積しています。

また、瀬戸内地域の温暖な気候に恵まれ、年間を通して晴れの日が多く、自然災害もほとんどないため、果物や野菜の生産や畜産に適しており、数多くの特産品があります。特に標高差に富んだ風土で栽培するぶどうは、種類も多く、良質なぶどうとして高評を得ています。

また、晴れの国に加えて、上空の気流が安定していること、さらには「井原市光害防止条例」を制定して過度な夜間照明を抑制する取り決めを行っているため、美しい星空の見えるまちとしても、評価を受けています。



【井原市データ】

- ・ 標高：海拔24.0m～650.3m
- ・ 総面積：243.54km²
- ・ 平均気温：13～15℃
- ・ 年間降水量：約1000mm
- ・ 人口：39,087人
- ・ 世帯数：16,769世帯

井原市マスコットキャラクター
でんちゆうくん



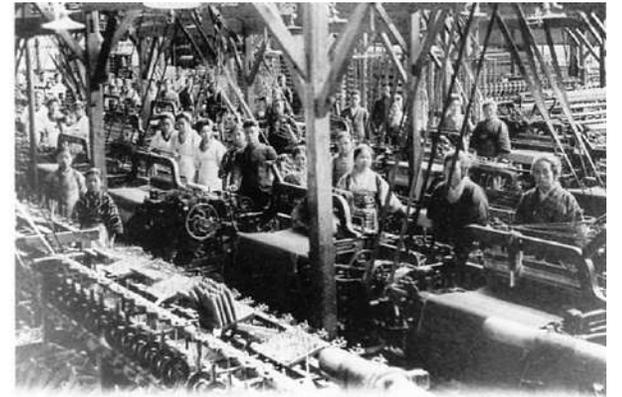
井原デニムの歴史

井原地域は、晴れの日が多く、「井」戸水の湧き出る「原」っぱの名のとおり、小田川の豊富な伏流水の恩恵を受けるなど綿花栽培に適した土地であったことから、江戸時代の比較的早い時期から幕府領や旗本領の下、木綿作が盛んに行われていました。木綿作が普及するにつれ、その木綿を原料に製糸・機織りの加工を行う女性の諸稼ぎが発展し、いつしか井原地域で織られた木綿織物は、畳表とともにご当地幕府領の特産品として流通するようになりました。遅れること藍葉栽培が始まり、藍染めの織色木綿として、江戸時代後期には、参勤交代により、井原産藍染木綿織物は瞬く間に全国に知られるようになりました。



明治時代に入ると、地方初の動力織機を導入した井原織物株式会社が明治24年に設立されるなど、手織機から動力織機へ、また農家の副業が機業経営へと変化がみられるようになり、動力織機を据え付けた工場が増加しました。また、色染業も現れ、藍染めから硫化染料を使用するなど、人造染料が使われるようにもなりました。

大正時代には、綿糸を双糸にして厚地に仕上げる小倉服地（備中小倉）生産が井原地域の織物生産の8割を占め、学生服や軍服の服地として、国内のみならずアジアやオセアニアへ輸出を行っていました。また、綾綿布の生産も確認されており、井原地域では、すでに大正時代からデニム地を生産していたことがわかります。



このように、厚地の藍染木綿織物技術を有し、綾織りというデニム地の原型が出来上がっている中、戦後、アメリカ軍のGHQが履いていたジーンズを参考に、昭和20年後半には、国産ジーンズを生産販売していたとされています。昭和30年代に入ると空前のジーパンブームが訪れ、昭和45年～48年にかけて年間1500万本ものジーパン（国内シェア約75%）をここ井原地域で生産していたとされています。



シャトル織機と
セルビッチデニム



その後は、オイルショックや為替の変動相場制への移行、低賃金の労働力を使った安価な外国製品の台頭による影響を受け、生産量は落ちていきましたが、色や柄、生地質の改善を行うなど、日々研究、努力を重ね、付加価値を高めていった結果、伝統的なシャトル織機を使用した「セルビッチデニム」をはじめ、模様を織り込んだ「ジャガードデニム」、草木染め

など染料にこだわったものや、機能的な合成繊維と組み合わせたものなど、多種多様なデニム生地が井原でつくられ、欧米のバイヤーから高い評価を受けています。



ジャガードデニム

井原デニムの取り組み

①井原デニムストアの整備

平成22年8月にオープンした井原駅構内の『D# THE STORE (ディーシャープガストア)』を平成29年3月にリニューアル。井原デニムの情報発信拠点として店舗名を『井原デニムストア』に変更した。

新店舗には、ストア機能に加え、井原デニムの歴史を紹介するミュージアム、縫製などが体験できるスタジオを整備。

【D# THE STORE】



【井原デニムストア（現在）】



②井原デニム地域ブランドの立ち上げ

まずは、「井原デニム」を地域の共有財産として位置づけ、市民みんなで守り、育てていくため、地域団体商標を取得。

平成29年10月 地域団体商標・ロゴマークの商標 申請

平成31年 3月 商標登録



「井原デニム」をブランド化し、一般消費者の知名度向上を図っていくため、平成29年12月13日に「井原デニム審議会」を設立。

備中織物構造改善工業組合員企業が井原市内で織布したデニム生地を用い、井原デニム審議会の審査に合格した最終製品を井原デニム地域ブランドの認定製品として下げ札や織ネームを付して販売している。これにより、デニムの産地として井原の認知度を高め、各企業の売上増加と地場産業の成長・発展を目指すほか、認定製品の信用を高く維持することができる。



③綿いっぱい運動



小学1年生
へプレゼント



デニムの原材料となる綿を、井原市内で栽培し、デニム生地「井原ハートフルデニム」を作ろうと動き出したプロジェクトで、平成24年度から綿花の種を市民、学校、公民館等に配布して、多くの方々のご協力をいただき、毎年約200～300Kgの綿を収穫しています。

平成28年度からは収穫された綿を市内の織布工場でデニム生地にし、井原高校家政科や一般ボランティア、市内縫製事業者の協力により『いばらハートフルデニムバッグ』を作製し井原市内の小学校新1年生への入学記念品として配布している。

④エブリディ・デニムでえ！の実施

「デニムのまち井原」をPRするため、平成24年度より毎年5月から10月のクールビズ期間中の毎週水曜日を「ジーンズデー」と銘打って、井原市職員が勤務時間中にジーンズを着用。平成30年度には、期間を通年に拡大し、毎週水曜日の実施となる。

そして、令和元年度からは、業務に支障がない範囲で**毎日のデニムの着用**を奨励し、市長・副市長も公務にて着用している。

また、令和2年度には、市職員が仕事で着用するオリジナルのデニムジャケットも作製。



井原市長
大舌 勲



副市長
猪原 慎太郎